

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語接続詞の捉え方：

ソレデ、ソシテ、ソレガ、ソレヲ、ソコデについて

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-01-29 キーワード (Ja): キーワード (En): connectives, demonstrative so-, anaphora, interface, syntactic position 作成者: 竹内, 史郎, 岡崎, 友子, TAKEUCHI, Shiro, OKAZAKI, Tomoko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001422

日本語接続詞の捉え方

——ソレデ、ソシテ、ソレガ、ソレヲ、ソコデについて——

竹内史郎^a 岡崎友子^b

^a 成城大学／国立国語研究所 共同研究員 [-2013.10]

^b 東洋大学／国立国語研究所 共同研究員 [-2013.10]

要旨

本稿は、指示詞研究と接続詞研究のインターフェースを見出す試みである。先駆的な研究がわずかに認められるものの、これまで両者のインターフェースが一つの研究領域として掘り起こされることはほとんどなかった。ソレデ、ソシテ、ソレガ、ソレヲ、ソコデはいずれもソ系列指示詞を含む接続詞であるが、このような接続詞のより精密な記述のために、あるいは、それらの歴史的な変化を記述する基盤を築くために、代示要素を含む接続詞についての一つの整理のし方を示したい。まず、ソ系列指示詞を含む接続詞のソの照応のあり方に着目し、そのはたらきに少なくとも3類の区別が認められることを明らかにする。また、モーダル助動詞の意味的スコープ、疑問助詞の意味的スコープを利用して上述の接続詞について文中での統語的な位置を考える。以上の観点からの分析を総合した上で、これまでの整理のし方では取り出すことのできなかったソレデ、ソシテ、ソレガ、ソレヲ、ソコデにおける個性性と共通性を示す*。

キーワード：接続詞、指示詞のソ、照応のはたらき、インターフェース、統語的位置

1. はじめに

これまでの日本語接続詞の整理には主に二つのやり方があったように思う。一つは、同一形式の接続詞をいくつかの用法にわけるやり方である。例えば、ソシテという形式に時間的前後関係を表す用法と並列関係を表す用法を認める、あるいは、ソレデという形式に時間的前後関係を表す用法と因果関係を表す用法を認めるというように。そしてもう一つは、形式の異なる接続詞を同一の用法とみなすやり方である。例えば、「並列」ないし「累加」と称してソシテ、ソレデ、ソレカラ等がまとめられる、あるいは「転換」と称してサテ、ソレデハ、トコロデ等がまとめられるというように。

このように、従来は、同一形式における用法の違いに着目したり異なる形式における用法の共通性に着目したりして整理することが一般的であったが、こうしたやり方に加えて、接続詞に含まれる代示要素のはたらきや接続詞自体の文中での統語的なステータス等を考慮して整理するやり方があり得るように思う。以下では、ある種の接続詞のより精密な記述のために、あるいは、それらの歴史的な変化を記述する基盤を築くために、代示要素を含む接続詞について一つの整理

* 本稿は、国立国語研究所独創・発展型共同研究プロジェクト「日本語文法の歴史的研究」(プロジェクトリーダー：青木博史)の研究結果であり、2014年度日本語学会春季大会(5月18日、早稲田大学)での口頭発表に基づき大幅に加筆・修正を加えたものである。また、平成25～27年度・29年度成城大学特別研究助成金およびJSPS科学研究費補助金(基盤研究(C))「日本語の連文における「接続語」の理論的基盤の構築」課題番号22520481、研究代表者：岡崎友子)における研究助成を受けている。

のし方を示すこととしたい。

ソレデ、ソシテ、ソレガ、ソレヲ、ソコデはいずれもソ系列指示詞を含む接続詞である。このような接続詞の構成性については、後述するように、田村（2005）を除くと、従来の研究においてほとんど検討されておらず手つかずの状態である。そこで、本稿では、まず、ソ系列指示詞を含む接続詞のソの照応のあり方に着目し、そのはたらきに少なくとも3類の区別が認められることを明らかにする。また、モーダル助動詞の意味的スコープ、疑問助詞の意味的スコープを利用して上述の接続詞について文中での統語的な位置を考える。以上の観点からの分析を総合した上で、これまでの整理のし方では取り出すことのできなかったソレデ、ソシテ、ソレガ、ソレヲ、ソコデにおける個別性と共通性を示すこととする。

2. モーダル助動詞の焦点と接続詞に前後する文

従来の研究では、接続詞の構成的な見方が具体的に検討されることがほとんどない中で（塚原（1968）、佐治（1991）、佐久間（1991）、さらには、ひけ（1985）、ひけ（1986）、ひけ（1987）、森田（1989）、浜田（1995）、森山（2006）等を参照）、田村（2005）は、接続詞の構成性を問題とし構成的な接続詞の存在を明らかにしている。本稿では、まず、先行する重要な研究として田村（2005）に言及し関係するところを具体的に示してみたい。

よく知られているように、日本語には、モーダル助動詞の焦点となる情報について次のような制限がある。

- (1) モーダル助動詞の焦点が話し手自身の属性・内的状態や過去の直接体験に置かれた場合、その文は不自然になる。 (田村 2005: 97)

この制限により、普通モーダル助動詞の意味的スコープに話し手の直接体験が含まれると不自然になる。

- (2) a. ?私は賞味期限切れのケーキを食べたのだろう¹。
b. ?私はお腹が痛くなったのだろう。 (以上、田村（2005）より)

ところが、ソレデに前後する2文の場合、先行する文と後続する文に話し手の直接体験が含まれていても、2文全体としての解釈は自然なものとなる。

- (3) 私は賞味期限切れのケーキを食べた。それで、お腹が痛くなったのだろう。 (田村 2005 より)

一見モーダル助動詞の焦点が話し手の内的状態におかれているように見え、(1)の制限に違反しているようであるが、この例は自然である。ソレデに前後する文が話し手の直接体験を含んでいても全体として容認可能となるのは、モーダル助動詞の焦点が、後続する文の「(私は)お腹が

¹「賞味期限切れ」を焦点とすれば自然であるが、この解釈は田村（2005）の意図するところではない。

痛くなった」という話し手の直接体験にあるのではなく、「賞味期限切れのケーキを食べ」ることと「お腹が痛くな」ることにおける両者の関係にあるからである。そして、それらの関係を焦点化するには、ソレデに先行する文がモーダル助動詞の意味的スコープに入らなければならないから、モーダル助動詞の意味的スコープには、ソレデに後続する文のみならず先行する文も含まれることになる。つまり、接続詞のソレデには、先行する文との照応関係が認められるということになる。

続いて、ソシテとモーダル助動詞が共起する場合に言及しよう。

- (4) a. ?私は賞味期限切れのケーキを食べた。そして、お腹が痛くなったのだろう。
 b. ?私がプログラムのバグを指摘した。そして、担当の山下が修正作業を行ったのだろう。
 c. 顧客がプログラムのバグを指摘した。そして、担当の山下が修正作業を行ったのだろう。 (以上、田村 (2005) より)

(4a) では、ソシテに先行する文、後続する文のどちらにも話し手の直接体験が含まれており、(4b) では、ソシテに先行する文だけに話し手の直接体験が含まれている。また、(4c) はどちらの文にも話し手の直接体験が含まれていない。(4a) (4b) に示すように、ソシテに先行する文であれ、後続する文であれ、話し手の直接体験が含まれていれば不自然さが認められるのに対し、どちらにも含まれていなければ自然な解釈となる。

先行する文で表されるのが話し手の行動であるか、話し手以外の行動であるかによって、(4b) と (4c) のように容認度が異なることから、(4a) と (4b) の不自然さをもたらしているのも (1) の制限と考えられる。つまり、ソシテを用いた例では、先行する文の事態、後続する文の事態の両方がモーダル助動詞の焦点となっており、先行する文との照応関係が認められるということになる。

なお、田村 (2005) では、並列関係を表すソレデ、ソシテは、先行する文との照応関係を持たない非構成的な接続詞であるとされている。詳しくは省略するが、(5a) (5b) では、ソレデ、ソシテに先行する文がモーダル助動詞の意味的スコープに入っていないことがわかる。

- (5) a. 広田さんは医者だ。それで、あの山田さんという人は弁護士なのだろう。
 b. 私は猫好きだ。そして、彼は犬好きなんだろう。 (以上、田村 (2005) より)

以上のように、田村 (2005) では、ソレデやソシテに含まれる代示要素が先行する文と照応関係を持つことにより、先行する構造的に独立した文がモーダル助動詞の意味的スコープに入ってくることになると考えられている。その上で、ソレデやソシテが「anaphor + conj」型接続詞 (conj は conjugation の略) としてまとめられ、次のように LF を用いた一般化を示している。

- (6) S1_i [(anaphor_i + conj) S2] Modal.
 └──────────┘ ↑

モーダル助動詞の統語的スコープが [] で表され、照応関係が同一指標と矢印によって示され

ている。接続詞に含まれる代示要素はソレデのソレ、ソシテのソに相当するものであり、節の代用形である。接続詞がモーダル助動詞の統語的スコープ内にあり、そして接続詞に含まれる代示要素が先行する文と照応関係を持つならば、先行する文は後続する文のモーダル助動詞の意味的スコープに入ることができると考えられる。

田村（2005）では、接続詞に含まれるソに照応のはたらきがあるかどうかを客観的に判断する基準として、

- ・主文末のモーダル助動詞が、接続詞に先行する文と主文との関係を焦点としうるかどうか
 - ・主文末のモーダル助動詞が、接続詞に先行する文と主文の全体を焦点としうるかどうか
- といったことが示された。本稿でも、後の考察においてこのような発想を積極的に生かしていくこととする。

3. ソレデとソシテ

以上をふまえ、ソレデ、ソシテの照応関係のあり方について、さらに考察を進めよう。以下で扱うのは因果関係を表すソレデ、時間関係を表すソシテに限ることとし、並列関係を表すソレデ、ソシテについては別の機会に言及したい。

まず、過去に実際に修正作業を行った人が次のように言うのは自然ではない。話し手の過去の直接体験にモーダル助動詞の焦点が置かれているからである。

(7) ?私は、修正作業を行うことになったのだらう。

しかし、(7) をソレデに後続する文とし、さらにソレデに先行する文も置いてみよう。

(8) 「どうして先日は修正作業を行うことになったの？」と説明を求められて
私がプログラムのバグを発見した。ただちに担当の山下にバグの発見を告げた。それで、
私が修正作業を行うことになったのだらう。

(8) は、話し手の直接体験が含まれるにもかかわらず自然である。すでに見たように、モーダル助動詞の焦点が先行する文と後続する文との因果関係にあるからである。そしてここから、ソレデが先行する文と照応関係を持ち、このために、後続する文のみならず先行する文もモーダル助動詞の意味的スコープに入っていることがわかる。以上のことに加えて(8)では、ソレデに先行する文が二つあり、そのいずれもがモーダル助動詞の意味的スコープにおさまっていることに注意しよう。さらに言うと、ソレデに先行する文がさらに増えたとしても、それらはモーダル助動詞の意味的スコープにおさまる得る。(9)では三つの文がモーダル助動詞の意味的スコープにおさまっている。

(9) 「どうして先日は修正作業を行うことになったの？」と説明を求められて
私がプログラムのバグを発見した。ただちに担当の山下にバグの発見を告げた。山下の上
司がそれを確認した。それで、私が修正作業を行うことになったのだらう。

そうすると、ソレデは、先行する直近単一の文と照応関係を持つというよりは、先行する直近複数の文との照応関係を持つことになる。これを (6) にならう形で表せば (10) のようになる。

- (10) $\dots S3_i, S2_i, [(ソレ_i + デ) S1]$ Modal.
-

次に、ソシテの照応のあり方も確認しておこう。ここでは、文と文の関係がフォーカスされているのではなく、ソシテに前後する文の全体が焦点となることを意図している。

- (11) 「この騒ぎは何？いったい何があったの？」と説明を求められて)

推測だけど、顧客がクレームを山下に伝えた。そして、山下が顧客に言い返したんだろう。

この例はいかにも自然である。ソシテに先行する文にも、後続する文にも話し手の直接体験が含まれていないからである。これに対し、ソシテに先行する文に話し手の直接体験が含まれることになるとうなるだろうか。

- (12) 「この騒ぎは何？いったい何があったの？」と説明を求められて)

?推測だけど、私が顧客のクレームを山下に伝えた。そして、山下が顧客に言い返したんだろう。

やや微妙な判断となるが、(11) と (12) を比較すると (12) の方が容認度が低いように感じられる²。(11) では、ソシテに先行する文に話し手の直接体験が含まれておらず、(12) ではソシテに先行する文に話し手の直接体験が含まれている。これにより、容認度に差が生じていると思われる。(12) の容認度が下がる理由を、本稿でも、ソシテが先行する文と照応関係を持ち、このために後続する文のみならず先行する文もモーダル助動詞の意味的スコープに入ることになっているからと考える。その証拠に、上に見た (12) から文末のモーダル助動詞を取り去るとすわりがよくなる。

- (13) 「この騒ぎは何？いったい何があったの？」と説明を求められて)

推測だけど、私が顧客のクレームを山下に伝えた。そして、山下が顧客に言い返したんだ。

それでは、ソシテに先行する文が複数ある場合はどうだろうか。

- (14) 「この騒ぎは何？いったい何があったの？」と説明を求められて)

推測だけど、私が顧客のクレームを山下に伝えた。山下は顔を紅潮させた。そして、山下は顧客に言い返したんだろう。

ソシテに先行する 2 文のうち、遠い方の文には話し手の直接体験が含まれるようにし、直前の文

² 「そして」には「そうして」に相当する用法が備わっていると思われるが、ここではその用法での解釈を望むものではない。よって、(12) を判断する際には「そして」を「そうして」と混同しないことが大事である。(12) では、ソシテでつながれる出来事が時間的に隣接するものと解釈されたい。

には含まれないようにした場合、きわめて自然である。(14)と(12)では判断に差があることを確認されたい。直近の文に話し手の直接体験を含む(12)は容認度が低く、含まない(14)は自然であることから、ソシテと先行する文との照応は、直近単一の文に限られると言える。

ソレデとソシテを比較した場合、ともにモーダル助動詞の統語的スコープの内側に位置するという点では同じであるが、両者の照応のあり方は異なる。以上をまとめると表1のようになる。

表1 ソレデ、ソシテの照応と統語的な位置

	Modal内
直近複数の文が可能	ソレデ
直近単一の文に限る	ソシテ

次節以降、ソレガ、ソレヲ、ソコデについて考察を加えていく。

4. ソレガとソレヲ

4.1 ソレガの構成性

ソレガにおいても、モーダル助動詞と共に起する文を考えてみよう。(15)は先行する文に話し手の直接体験を含んでおり、そして自然である。

(15) (「いったい何があったの? どういうことなの?」と説明を求められて)

私はプログラムのバグを指摘していた。それが、関係者に私の指摘が伝わっていなかったのだろう。

ソレガに先行する文に話し手の直接体験を含む場合に容認度が下がらないとすると、ソレガは、先行する文と照応関係を持たないと考えられるかもしれない。しかしソレガは、次に示すように、そもそもモーダル助動詞の統語的スコープの外にあり、先行する文との照応関係がないように見えているだけの可能性がある。

(16) ソレガ [S] Modal.

そこで、モーダル助動詞より広いスコープを持つ疑問助詞を用い、ソレガの照応の可能性について考えることにしよう。過去の出来事に言及する際、通常、疑問のスコープに話し手の直接体験が含まれると不自然になり(→(17a)), 含まなければ自然となる(→(17b))。

- (17) a. ?私に顧客の指摘が伝わっていなかったのか。
b. 彼に顧客の指摘が伝わっていなかったのか。

しかしソレガに前後する2文の場合、後続する文の方に話し手の直接体験が含まれていても2文全体としての解釈は自然なものとなる。

(18) 顧客がプログラムのバグを指摘していた。それが、私に顧客の指摘が伝わっていなかったのか。にわかに信じられないよ。

(18) では、(17a) がそのままソレガに後続する文となっているが、この例は自然である。というのも、(18) では、疑問の焦点がソレガに後続する文に含まれる話し手の直接体験に置かれているのではなく、ソレガによって表される文と文の関係、すなわち、対立・共存の関係が疑問の焦点となっているからである。このように文と文との関係が疑問の焦点となる場合、ソレガに後続する文のみならず先行する文も疑問助詞の意味的スコープに入ってこなければならないから、ソレガには先行する文との照応関係が認められるということになる。

また、ソレガは、先行する直近複数の文との照応が可能である。

(19) 準備は完ぺきに整っていた。スタッフたちの士気も上がっていた。それが、状況の変化でプロジェクトが大失敗に終わってしまって、まったく残念だ。

以上から、ソレガはモーダル助動詞の統語的スコープの外にあるが、疑問助詞の統語的スコープの内にあると言える。上に述べたことは、次のように表すことができる。

(20) $\dots S_{3i} S_{2i} [(ソレ_i + ガ) S1] \text{ Interrogative.}$

なお、ソレガに非状態性の文が先行するとすわりがわるくなる。

- (21) a. ?スタッフたちの協力もあり準備は完ぺきに整った。それが、突風が襲ってきて、店の看板や飾り付けが吹き飛ばされることになってしまった。
 b. スタッフたちの協力もあり準備は完ぺきに整っていた。それが、突風が襲ってきて、店の看板や飾り付けが吹き飛ばされることになってしまった。

ソレガは、先行する直近複数の文との照応が可能であり、なおかつ、照応関係にある先行する文が状態性のものに限られる。このようなソレガの照応のあり方はどのように説明したらよいだろうか。

4.2 文脈的結果状態との照応

金水 (2004) では、理論的なモデルとして、命題の集合からなる文脈と生起した出来事から文脈的結果状態が導出されるシステムが考案されている。

(22) $S_0 \xrightarrow{p} S_p$

S_0 は初期状態を、 S_p は文脈的結果状態を表す。初期状態ないし文脈的結果状態は $\{a_1, a_2, a_3, \dots\}$ (a_n は命題) として示されるような、様々な命題の集合である。この命題群は、発話者あるいは対話の参加者にとって、発話の時点で信じられ、かつ前景化されており、文脈あるいは状況によって異なる。 p は出来事を表し、初期状態 S_0 を前提として出来事 p が完成することによって、文脈的結果状態 S_p が導出される。 S_p は p の完成が語彙の意味として必然的に含意する語彙的結果状態 (例えば、「A が B を殺す」における「B の死亡状態」) そのものではなく、語彙的結果状態

を含むより広い概念である。

例えば p が「田中が皿を割る」である場合、 S_p には、語彙的結果状態である「皿が割れている」が常に含まれるが、もし S_0 に「母が田中に皿を割らないよう注意を喚起している」「母は田中の失敗に対して常に厳しく叱る」というような命題が含まれていれば、 S_p には「田中が母に叱られる可能性がある」という命題が付け加えられる。

文脈的結果状態は、次に示すように、直近の文脈的結果状態を前提とした出来事の完成により更新されていく。

$$(23) \quad S_0 \xrightarrow{p} S_p \xrightarrow{q} S_{pq} \xrightarrow{r} S_{pqr} \dots$$

文脈的結果状態に含まれる命題や出来事は言語化される場合もあれば言語化されない場合もあるが、言語化される場合、文脈的結果状態に含まれる命題は状態性の文³として、出来事は非状態性の文として表現されることになる（竹内 2006）。

さて、以上をふまえて再び（19）に目を移して、「準備は完ぺきに整っていた」「スタッフたちの士気も上がっていた」を文脈的結果状態に含まれる命題と見て、「プロジェクトが大失敗に終わってしまって」を文脈的結果状態に続く出来事であると見れば、（23）の図式によく当てはまるように思われる。このとき、ソレガは、文脈的結果状態を前提とした出来事の発生が自然ではないことを表す標識と見ることもできよう。

このように見れば、ソレガにおいて、直近複数の文との照応が可能で、また、照応関係にある文が状態性のものでなければならぬのは、ソレガに含まれる代示要素が直近の文脈的結果状態と照応関係にあることの現れであるように思われる⁴。

なお、浜田（1993）で掲げられている次のような例でも、ソレガは、後藤とスミスの間で信じられ、かつ前景化されている文脈的結果状態を指示しているものと考えられる。

(24) 後藤 どう、具合は。

スミス それが、今回は熱が出てしまって（浜田（1993）より）

4.3 ソレヲの構成性

ソレヲも先行する直近複数の文との照応が可能である。

(25) 新装開店の準備は整っていた。あとはお客が来るのを待ただけだった。それを、例のヤクザがやってきて、お店をめちゃくちゃにしたのか。にわかに信じられないよ。

³ 具体的には静的述語による文のほか、継続相、パーフェクト相の述語による文、時間的限定性のない脱時間化された文、さらには「かもしれない」「可能性がある」「だろう」等を述語に持つ文が相当する。

⁴ この点について注目すべき研究に庵（2007）がある。庵（2007）は、ソレガのソレに、先行文脈からの「テキストの意味の付与」が認められるとし、ソレガに含まれるソレに対応する機能を認める点で本稿と類似する分析を示している。ただし本稿の分析は、庵（2007）の「テキストの意味の付与」を念頭に置くものではない。

しかしソレヲは、ソレガと違って先行する文が非状態性でも自然である。

- (26) a. 友人の協力もあって新装開店の準備が整った。それを、例のヤクザがやってきて、お店をめちゃくちゃにしてしまった。
 b. 山田が当局の不正に関する重要な情報をとってきた。それを、上司がいろいろと理由をつけてスクープを自分の手柄にしてしまった。

(25) では、ソレヲに先行する文が状態性であり、ソレヲが文脈的結果状態と直接的に照応していると見ることに問題はない。これに対し、先行する文が非状態性である(26a)(26b)については、次のように考えられる。

- (27) 小麦粉と牛乳をよく混ぜ、それをフライパンに注ぐ。 (金水(1999)より)

(27) では「それ」の言語的先行詞と言えるものが存在しない。こうした現象からわかるように、指示詞のソの照応は単に語句の一致ではなく、推論によって形成される状況を領域とする(金水1999)。

接続詞のソレヲに含まれる代示要素の照応にも同様の推論が関与していると見ることができると。すなわち、(26a)(26b)では、ソレヲは、「友人の協力もあって新装開店の準備が整った」「山田が当局の不正に関する重要な情報をとってきた」という出来事が完成した後の文脈的結果状態と照応関係にあると考えられる。

5. 再びソレデ

前節で導入した文脈的結果状態の議論をふまえて、再びソレデの照応のはたらきにも言及しよう。第3節において、ソレデはソシテとは異なり、先行する直近複数の文との照応が可能であると述べたが、ソレデに先行する文は非状態性でも状態性でも自然である。

- (28) a. 顧客はプログラムのバグを指摘した。担当の山下が顧客の指摘を聞き入れた。それで、山下の部下が修正作業を行ったのだろう。
 b. 長男はおたふく風邪。次男はインフルエンザ。妻は持病で寝込んでいる。それで、私は今回の出張をキャンセルした。

これは上に見たソレヲと同じ現象であるが、このことは、ソレデとソレヲに含まれるソレが機能的に等しいことを示しているように思う。すなわち、ソレデに先行する文が状態性である場合には文脈的結果状態と直接的に照応関係にあり、ソレデに先行する文が非状態性である場合には出来事が完成した後の、非言語的な文脈的結果状態と照応関係にあるとすることができる。

ただし、ソレデはモーダル助動詞の統語的スコープにおさまっているのに対し、ソレヲはモーダル助動詞の統語的スコープにおさまらず、疑問助動詞のスコープにおさまるということで両者の統語的な位置づけは異なるという点に注意が必要である。以上をまとめると次のようになる。

表2 ソレデ、ソシテ、ソレガ、ソレヲの照応と統語的な位置

	Modal 内	Modal 外かつ Interrogative 内
直近複数の文（制限なし）が可能	ソレデ	ソレヲ
直近複数の文（状態性）が可能		ソレガ
直近単一の文に限る	ソシテ	

6. ソコデ

ソコデに二つのタイプがあることを、まずは指摘しておきたい。

- (29) a. 山田が手を上げた。田中も山田につづいた。そこで、先着順の申し込みをひとまず区切りとした。
- b. ステージ上のパフォーマンスに魅了され、会場のムードは一気にクライマックスに達しようとしていた。そこで、どういうわけか、会場の照明が一斉におちた。

例えば、(29) の文頭にあるソコデを文中に移し、次のような例を考慮してみる。

- (30) a. 山田が手を上げた。田中も山田につづいた。先着順の申し込みを、そこで、ひとまず区切りとした。
- b. ステージ上のパフォーマンスに魅了され、会場のムードは一気にクライマックスに達しようとしていた。どういうわけか、会場の照明が、そこで、一斉におちた。

(29ab) と (30ab) は文の意味において異なるところがなく、この種のソコデは文頭から文中に移したとしても文の意味を変えないことがわかる。これに対し、次に示すソコデの場合はどうだろうか。

- (31) a. 戦前という時代の本質を明らかにするためには、戦前の、明るくて文化的な時代と、暗くて恐ろしい残酷な時代がどう共存していたのかを知る必要があった。そこで、当時書かれた小説、映画、新聞、当時の人々の日記などを読みあさった。
- b. このような接続詞の構成性については、これまでほとんど検討されておらず手つかずの状態である。そこで、この発表では、接続詞の代示要素のあり方に着目して、そのはたらきに少なくとも5類の区別が認められることを明らかにする。

(31) における文頭のソコデを、同様に文中に移してみると次のようである。

- (32) a. 戦前という時代の本質を明らかにするためには、戦前の、明るくて文化的な時代と、暗くて恐ろしい残酷な時代がどう共存していたのかを知る必要があった。当時書かれた小説、映画、新聞、当時の人々の日記などを、#そこで、読みあさった。
- b. このような接続詞の構成性については、これまでほとんど検討されておらず手つかずの状態である。この発表では、接続詞の代示要素のあり方に着目して、#そこで、そ

のはたらきに少なくとも 5 類の区別が認められることを明らかにする。

「そこで」を文中に移した (32) では文の意味が変わってしまう。このように、ソコデには、文中に置いても文の意味が変わらない類と文中に置くと文の意味が変わってしまう類があることがわかる。ここでは、文中に置いても文の意味が変わらない類は考察の対象とせず、文中に置くと文の意味が変わってしまう類を扱うこととする。

文の意味を変えることなく文中に置くことができない類の例をさらにあげよう。この種のソコデは直近複数の文との照応関係が可能で、かつ先行する文が状態性のものに限られることに注意されたい（なお、以下ではソコデと表記して、文中に置くと文の意味が変わってしまう類のソコデを表すこととする）。

- (33) a. 最近執筆活動や、テレビ出演などでスケジュールはぎっしり。そのペースで仕事をこなしていくには常に考えるスピードを速くしなければならない。そこで、DHA サプリメントを飲むようになったのです。
- b. だが、制裁とともに対話も重視するオバマ政権とは隔たりが大きい。そこで、ネタニヤフ氏は自ら率いる右派政党リクードとつながりが強い米共和党と連携し、今月中に山場を迎える核協議に水を差そうとしたと見られる。
- c. 西岸地区は欲しいけれど、パレスチナ人を国民にしたくない。そこで離れたガザ地区を利用している。ガザを「流形地」として、不都合なパレスチナ人の居住権を剥脱して西岸地区から追放したりしているのです。

さて、ソコデにおいては、後続する文の文末に疑問助詞が含まれていても、それに先行する文と後続する文の関係が疑問の焦点となることはない。

- (34) a. ?戦前という時代の本質を明らかにするためには、戦前の、明るくて文化的な時代と、暗くて恐ろしい残酷な時代がどう共存していたのかを知る必要があった。そこで、当時書かれた小説、映画、新聞、当時の人々の日記などを読みあさったのか。にわかに信じられないよ。
- b. ?最近執筆活動や、テレビ出演などでスケジュールはぎっしり。そのペースで仕事をこなしていくには常に考えるスピードを速くしなければならない。そこで、DHA サプリメントを飲むようになったのか。にわかに信じられないよ。

以上の例から、ソコデは、次に示すように疑問助詞の統語的スコープの外にあることになる。

- (35) ソコデ [S] Interrogative.

ソコデは、疑問助詞の意味的スコープを利用してその照応を検討することができず、ソレガやソレヲとは文中での統語的な位置づけが異なる。

この一方で、ソコデでは、先行する直近複数の文との照応関係が可能で、かつ照応関係にある先行する文が状態性のものに限られることからすると、ソコデは、ソレガと同様に、直近の文脈

の結果状態と照応関係にあると見ることができる。ソコデに含まれるソ系列指示詞のはたらきはソレガに含まれるそれと等しいと考えられる。

さいごに、ソコデにおける照応の機能と統語的な位置づけを示しておく。

(36) … S3_i, S2_i, (ソコ_i+デ) [S1] Interrogative.

7. まとめ

コヤソを含むかどうかということからすれば、接続詞は、コヤソを含まない類と含む類とに大別できる。ただしコヤソを含んでもそれらが照応のはたらきを有するとは限らないので、含まれるコヤソが照応のはたらきを有するかどうかを明らかにする必要がある。そして、いくつかの、照応のはたらきを有する接続詞が存在するとしてもそのはたらきが均質である保証はなく、それぞれに異なる可能性がある。またさらには、接続詞自体の統語的な位置を見定めることも重要である。

本稿は、以上のような見通しをふまえて、ソレデ、ソシテ、ソレガ、ソレヲ、ソコデについて考察を加えてきたが、ここにおいて、それらの個別性と共通性を取り出したことになる。この結果を表3に示す。ひとまず出そろった表3を見てみると、ソを含む接続詞の振る舞いが一様でないことがわかる。

表3 ソレデ、ソシテ、ソレガ、ソレヲ、ソコデの照応と統語的な位置

	Modal 内	Modal 外かつ Interrogative 内	Interrogative 外
直近複数の文 (制限なし) が可能	ソレデ	ソレヲ	
直近複数の文 (状態性) が可能		ソレガ	ソコデ
直近単一の文に限る	ソシテ		

ここに示されるそれぞれの形式における共通性と個別性は、従来行われてきた、同一形式における用法の違いに着目したり異なる形式における用法の共通性に着目したりする整理のし方では取り出すことができないものである。例えば、ソレデとソシテに関して言えば、ともに Modal の統語的スコープ内に生起するということで共通性が示され、照応のはたらきが異なるということと個別性が示されている。同様にソレガとソレヲについて言えば、ともに Interrogative の統語的スコープ内に生起するということで共通性が示され、照応のはたらきが異なるということと個別性が示されている。さらにソレガとソコデについて言えば、照応のはたらきが同じであるということと共通性が示され、生起する統語的な環境が異なるということと個別性が示されている。

また、表3におけるそれぞれの接続詞の位置は歴史的な変化の結果であることを示唆している。ソ系列指示詞を含む接続詞のそもそもの出発点はソ系列指示詞と助詞の組み合わせであるから、当初は指示詞のソの機能がそのまま認められるはずである。すなわち、状態性、非状態性の制限なく直近複数の文との照応が可能であることになる。つまり「直近複数の文 (制限なし) が可能」

の行がそれぞれの接続詞の出発点と見ることができ、ソレデとソレヲは照応のはたらきにおいて変化が認められず、ソシテは最も変化の進んだあり方を示し、ソレガとソコデがソシテに続くということになる。以上は表3の縦軸を進んでいく変化である。これに対し、横軸における変化は接続詞が遠心的な方向へ進んでいく統語的变化である。その統語的な位置がモーダル助動詞の統語的スコープの内側からその外側へ、さらには疑問助詞の統語的スコープの外側へと変化していく。こうした変化において、ソコデは最も進んだあり方を示し、ソレガ、ソレヲがこれに続き、ソレデとソシテが最も「出発点」に近いあり方を示している。

以上のように、表3からは、それぞれの形式の変化の度合いがさまざまであることを読み取ることができる。なお、ソ系列指示詞を含む接続詞の変化は横軸を進んでいく変化と縦軸を進んでいく変化の二つがあることになるが、これらの二方向の変化が連動して進んでいく理由は見出しがたく、ひとまず独立の要因による変化と見てよいように思う。

さいごに、一つ付け加えておくとすれば、指示詞研究と接続詞研究のインターフェースにおいても event の意味に関わる類から speech event の参加者を指向する類への変化が生じていることである。今回扱った接続詞の中で、ソレデとソレガには、言語的な先行詞を全く必要としない用法がある。すなわち、対話のセッションが終わって、時間が経過して、また新たに対話のセッションを迎えたとき、いきなりソレデ、ソレガの形式を用いて対話者は新たなセッションを開始することができる。

- (37) a. (数時間前に対話した相手に会って) それで、さっき話した件、どうなった？
 b. (数時間前に対話した相手に会って) それが、さっき話した件、うまくいかなかったよ。

こうした用法は独り言で用いることができないので speech event の参加者を指向することに特化していることを表していると言うほかないが、このときのソレデ、ソレガに含まれるソは対話者間で前景化されている文脈的結果状態と照応していると言うことができる。したがって、表3のあり方と関連づけるなら、縦軸、すなわち接続詞に含まれる指示詞の照応のあり方の変化の結果と考えられる。しかしながら、表3の縦軸にどう位置づけたらよいのか、現時点では判断がむずかしい。間主観化 (intersubjectivization) にまつわる現象と考えられようが、今後はこのような現象も統一的に扱っていく枠組みの構築が期待される。

8. おわりに

本稿は、指示詞研究と接続詞研究のインターフェースを見出す試みである。したがって、代示要素と助詞の組み合わせからなる名詞句と代示要素を構成要素とする接続詞の間を線引きすることよりも両者の一体性と連続性を認めることが重要であると考えている。すでに言及した通り、先駆的な研究がわずかに認められるものの、これまで両者のインターフェースが一つの研究領域として掘り起こされることはほとんどなかった。こうした観点からの研究はある種の接続詞研究における記述の精度を高めるだけでなく、他言語との比較・対照による日本語の特性の記述等につながっていくものと思われる。

参考文献

- 浜田麻里 (1993) 「ソレガについて」『日本語国際センター紀要』 3: 57-69.
- 浜田麻里 (1995) 「いわゆる添加の接続語について」仁田義雄 (編) 『複文の研究 (上)』 439-461. 東京: くろしお出版.
- ひけひろし (1985) 「『そして』と『それから』」『教育国語』 83: 44-53.
- ひけひろし (1986) 「『そこで』と『それで』」『教育国語』 86: 74-89.
- ひけひろし (1987) 「『それで』『だから』『したがって』」『教育国語』 88: 46-59.
- 庵功雄 (2007) 『日本語におけるテキストの結束性の研究』東京: くろしお出版.
- 金水敏 (1999) 「日本語の指示詞における直示用法と非直示用法の関係について」『自然言語処理』 6(4): 67-91.
- 金水敏 (2004) 「文脈的結果状態に基づく日本語助動詞の意味記述」影山太郎・岸本秀樹 (編) 『日本語の分析と言語類型』 47-56. 東京: くろしお出版.
- 森田良行 (1989) 『基礎日本語辞典』東京: 角川書店.
- 森山卓郎 (2006) 「並列」「累加」の接続詞の機能—「そして」「それから」などをめぐって」益岡隆志・野田尚史・森山卓郎 (編) 『日本語文法の新地平 3 複文・談話編』 187-207. 東京: くろしお出版.
- 佐治圭三 (1991) 『日本語の文法の研究』東京: ひつじ書房.
- 佐久間まゆみ (1991) 「接続表現の文脈展開機能」『日本女子大学紀要 文学部』 41: 9-22.
- 竹内史郎 (2006) 「ホドニの意味拡張—時間関係から因果関係へ」『日本語文法』6(1): 56-71. 東京: くろしお出版.
- 田村早苗 (2005) 「日本語接続詞の構成性／非構成性—ソシテ・ソレデ・ダカラについて」『京都大学言語学研究』 24: 85-115.
- 塚原鉄雄 (1968) 「接続詞」『月刊文法』 1(1): 39-43.

Connectives that Consist of *so-* and Other Elements in Japanese: *sorede, sosite, sorega, soreo, sokode*

TAKEUCHI Shiro^a OKAZAKI Tomoko^b

^aSeijo University / Project Collaborator, NINJAL [-2013.10]

^bToyo University / Project Collaborator, NINJAL [-2013.10]

Abstract

The purpose of this paper is to show that there is an interface between connectives that are composed of *so-* and other elements and demonstrative *so-* in analyzing Japanese connectives: *sorede, sosite, sorega, soreo, sokode*. The *so-* that is included in these connectives has an anaphoric relation with sentence(s) or assumption(s), but the anaphoric relation of *so-* is not the same, as follows:

- (1) *so-* in *sorede* and *soreo* can have an anaphoric relation with several previous sentences, and the meaning of the sentences can be either stative or non-stative.
- (2) *so-* in *sorega* and *sokode* can have an anaphoric relation with several previous sentences, and the meaning of the sentences must be stative.
- (3) *so-* in *sosite* is limited to the anaphoric relation with the immediately preceding sentence, and the meaning of the sentence can be either stative or non-stative.

Furthermore, by observing the semantic scope of modal auxiliary *nodaroo* and interrogative particle *noka*, the connectives described above are divided into three groups: *sorede* and *sosite* are inside the scope of *nodaroo*; *sorega* and *soreo* are outside the scope of *nodaroo* and inside the scope of *noka*; and *sokode* is outside the scope of *noka*.

Key words: connectives, demonstrative *so-*, anaphora, interface, syntactic position